

針葉樹會報

復刊第15号



1966. 9



発行日 1966年9月30日	針葉樹会報 復刊第15号	編集人 東京都府中市若松町 5-6-11 三井物産寮内 倉知敬
発行所 針葉樹会		
印刷所 錦光社		

山の思ひ出は
五月の白樺の緑。

山小屋の戸の隙間に
吹き込む野分。

それは

夜明け薄明の中に

目醒める未来への光り。

又は夕闇

雪線の彼方に

たそがれ行く淡い紅色

その仄かな光の中にすべてを溶かし

やがて

涯知れぬ彼方へすべてを運び去る

あはれな寂寥

……永遠の。

(追憶——高木英二・針葉樹三号より)

思い出の山行

高見 要

三年前に腎臓を患つて一年程入院し、此の方は医者に言わせると目下五〇点位の由、それにその治療の為に使用した新薬の副作用で難聴になり、爾來人類の声は聞えないといった状態で、山行は思い出の世界のみとなつたが、それだけに思い出はなつかしい。

私が山岳部に入部したのは昭和六年初夏、本科二年の時だった。入部の動機は、一、馬術部主将の役を小野に譲つていささか責任が軽くなつたこと、二、勝負を争う競技から勝負のないスポーツへのあこがれがあつたこと、三、前記の馬友小野を介して彼と同郷の友人山岳部の丸茂と交際があつたこと、などがキッカケだつたと思う。

何しろ本科二年という高学年からの途中入部なのでどうしても特別扱いになり、従つていわゆる下積みのシゴカレも経験しなかつたが、同時に基礎的な登高テクニックも覚える機会がなく、初めからムード派登山だつた。尤も私の同期の昭和八年組は亡くなつた太田主将をはじめ、増山・鈴木・丸茂・清水・勝田と何れもあまりスゴイ登山家ではなく、どちらかと言えばムード派的だったので結構居心地はよかつた。それに当時は針葉樹会が毎月のようにあって、人数も少なかつたため、マゴさん・

クマさん・コンちゃん・ベンちゃんなど大先輩とも、一回の山行も共にしていないのに、たちまち十年の知己のようになり、まことに楽しい部員生活だった。

部員としての山行は僅か二ヶ年、それでも大分稼いだが思い出の第一は、何んといつてもその年の七月、入部して最初の山行で、十合（現姓森）・大友と三人で「笠ヶ岳から立山までの大縦走」だった。笠谷初遡行というさゝやかながら目標をもつて元気一杯、中ノ湯を出発したのはよかつたが大きな荷物に参つて安房峠で昼寝したのが失敗、平湯から終バスに乗りおくれて柄尾までカンカン照りのバス道にアゴを出した。

第二日は案内人の大倉弁次の顔で笠谷途中のキコリ小舎に泊つたが、それから豪雨で三日間とじこめられ、一升酒を呑むキコリ達十五人と同宿した。さて笠ヶ岳の小舎で弁次を返して縦走を始めたのだが、連日の霧雨で遂に楽しみにしていた雲の平の野営もあきらめ黒部五郎岳に向つたが、一米先も判らぬ濃霧の中を残雪豊富なカールを登り、岩ツバメの声に心細さを覚え、急峻な詰めに肝を冷し、後には二米程の岩場を大苦労して尾根に立つた時はまことに蘇生の思い出、当時の十合は

どれだけの実力だったか知らないがまことに頼もしいうりーだーぶりだった。太郎兵衛平からあとは快晴に恵まれ無事終了を遂げたが、延々三週間、何んの音沙汰なしで家では大心配をした。

思い出の第二は昭和七年三月、増山・鈴木・十合と四人での「越後北ノ俣川入り」で、これは針葉樹第六号に詳しく書いたが、当初に立てる駒ヶ岳から尾瀬までの大縦走計画は天候不良で成らなかつたが、中ノ岳初登高寸前を含んで兎の肉を食いながらの一週間の雪中生活は、今考へても楽しい限りであった。

さて第三の思い出は昭和七年の八月、豊橋での神戸商大との定期馬術試合を終了して上

高地に入り、黒部東沢遡行を終えて来た、鈴木・十合・加藤・堀岡と五人で玄文沢にテントを張った生活だ。当初の目的は奥又白谷入りだつたが、堀岡が背中に腫物を出したので中止し、前穂・霞沢などで遊んでいたが堀岡の腫物が悪化して解散。自分は学生生活最後

其処にはあらゆる色彩の波があり、線の交錯があり、無限の空間があり、淋しく静かにうつろひ行く時の流れがあるのです。それはこの世の喜びの表現であり、又悲しい憂いの表現です。其処には愛のさゝやきがあり、永遠の憧憬と、寂寥とが宿り、祈りがあり、思い出があり、未來の暗示があります。そう

蒲田谷から槍ヶ岳小舎に入つたが、此處でスゴイ台風に遭い、最初の夜は畳一帖に三人というラッシュが、みんな下山して、第三夜は遂に四人になるまで頑張り通した。

（別れに送る言葉）高木英二・針葉樹
三号より

天目外れ

中川孫一

眺望はない。切れ目から、三峯、和名倉の黒木につゝまれた雄大な山頂がのぞまる。

自慢の豚汁を満喫する。十二時半出発。

目次

「天目へ行かれますか？」

秩父には山登りと結び付くいで湯（わかし湯）が多い。その一つの鹿ノ湯と熊倉山に、

とK君が念を押すように云う。（このダメ押が、当ることになった！）

秩父の主（神主ともいう）柿原君と登った。熊倉から天目（地図の西谷山）日原の長丁場を目指して。

鹿ノ湯は、先年の台風で電柱が倒れて以来昔ながらのランプの静かな宿である。湧出量は少ないから、湯槽の中は多分水割だろう。

ハイボール温泉である。

十月末の満山紅葉の谷津川ルートを登る。

七段にかかる七段滝などあって楽しいコースだ。やがて大岩壁が行手に立ち塞がり、谷津川の源頭がそこにあつた。右手（左岸）のヒラをジグザグに登り切ると急に視界が開け、西の空に両神の鋸歯、手前の紅葉と黒木の間にピカリと白く秩父鉄道自慢のロープウェイの駅舎が光る。

熊倉山頂は地元山岳会の清掃班の手できれいに片付けられていた。K君の顔見知りの青年が今日の当番になつていた。尾根の中途の小突起の山頂は、樹林の中にあつて、広大な

思い出の山行

高見要

天目外れ

中川孫一

「四十の手習い」その後

大橋喜治

「夏の便り」から

(6)

鳥帽子沢奥壁

大賀二郎

夏の穂高

(9)

会務報告

(11)

倉知敬

中島寛

カラコルム先遣隊報告・その2

佐藤之敏

(17)

(15)

かゝっているし、天目山頂を除けて捲いてゆく方が、西谷小屋への近道だと考え、左手の細い踏跡に踏み込んだ。間もなく踏跡は絶えた。左下は源頭である。（日原側の小川谷だなと考へた。この谷なら二十年前に登ったことがある！）そのまま降り氣味に進む。もう完全に径は絶え、苔深い源頭に踏込んでしまった。おかしいなと思ったが、もう大分降つているし、やがて沢（小川谷）沿いの径が現われるだろうと進むうち谷間はもう日没となり、懷中電灯を頼りに降りつづけた。やがて左岸に石垣が見えた。ハハア、この上には径があるに相違ないと、登り口を探すが判らない。もうトッププリと暮れてしまい、径があるとしても、軌道などのある夜道は危険だ。ビバークときめて適地を探しながら少し降ると右岸に岩小屋があつた。スエーター、ビニー、ル、雨具上下を着込んで横になる。寝床は湿った砂交りの粘土で軟かいが、頭が高く足が低く（谷の傾斜そのまゝ）段々ズリ落ちてゆく。駅までの十二時間を考えてウンザリする。風はなく、空はよく晴れて、谷間は割合暖かいので、十月末だというのに寒くないのがありがたい。夜の更けるのが待遠しい。長い、長い一睡もしない一夜が明けた。昨夕の石垣まで

で戻つてみると、石垣の右上に短かい梯子がある。ナーニングと上りながら陽光のありがたさが身に沁みる。と細径が谷沿いに続いている露に濡れているので慎重に渡る。夜道の冒險をしなくてよかつたと思う。七時半、谷が大きく右に曲がる処に指導標があった。「至州日野駅」。アツと開いた口が塞がらなかつた。小川谷と思つて踏込み、日原に出るものと思つて降つてきた道は、秩父側川浦谷の百間橋道。（古い軌道の連続で、二度と歩きたくないとK君が云つていた！）であつた。が問題の軌道は、全部新らしくなつていたので、足早に渡つても何の不安もなかつた。八時半、飯場に出る。アト一時間半で駅だという。しばらく行つた処で、飯場で見かけたトラックに便乗でき、駅前の煙草屋から、自宅に電話を頼んで、電車に乗つた。寄居で、池袋行の東上線に乗込むと間もなく

鹿ノ湯—日原は九—十時間はかかるから西谷小屋へは遅くも四時までには着いていなければならぬ。それより遅くなれば一泊するのが無難だ。大血川峠から、西谷小屋への近道があると、案内書にあるのも（アルバインガイド15奥秩父五七貢地図）この事故を招いた因となつた。他日、日原側から天目山（西谷山）に登つて、コースの誤りを正してみたいと思っている。

× × × ×

もしも私達が、夏の山を楽しむべきものとすれば、秋の山は味ふべきものでもあるの

澄み切つた濁りのない、だけど、何故とは知れず物淋しい私達の心の底にまで紅の葉が照り、谷の流れがさゝやき、野分が響くのです。其処に冴かに月が照り、清く淋しく星が瞬き、木の葉がゆれ、病葉が散るのです。落葉を踏んでは、ささやかな小径を辿り、紅葉を浮かべる溪流を縫い、冷たい黒い岩壁を攀じては、寂しくこだまし、やがて無から無へ消えて行く私達の足音を聴き、時の流れを感じ、心の秋を感じるのです。

（別れに送る言葉—高木英二・針葉樹
三号より）

このコースは、春でも一日では無理である。

えびろぐ

「四十の手習い」その後

—— 山田先輩と御在所の

岩場に遊ぶ

大橋喜治

七月十日

先の五月連休の五竜残雪行の際、山田さんとの“約束”は出来上っていたのだが、雨の名古屋で、いざ背広姿にサブザックの先輩を迎えてみると、まったく嬉しくなった。

早速、小生のアバラヤで、旅装を解いて頂いた後、喜んで同行して呉れた名古屋の山仲間、木村哲夫兄（J・A・C仲間）のスバルで、御在所に向った。

公害の都、四日市を経て、先夜のアルコールが、胃を楽しませていて、湯の山温泉着、十一時。なんでも、先輩の想い出深き新婚旅行地の由。

先輩、何を感違いたのか、東洋一と言われる御在所頂上へのケーブル往復切符購入せんとす。小生、先輩の登攀意欲を、初めて、疑う。

シーズンを迎えた藤内壁は、若い人達で、

混雑するも、四十六才の先輩を励ましつゝ、登攀開始。

「今日は、キット俺が、最年長だぜ」

と、山田さんは胸を張っている。木村兄と、前以っての打合せで、藤内壁でも、技術的に問題はないが、楽しめるバラエティということで選んだ前尾根に向う。ラッシュ・アワー

の為、予想以上の時間を喰うも、結構、快調に飛ばす。

年齢に似合わない先輩の強引に登る姿を見て、目頭が、熱くなる。本当である。チムニ

ー登攀などは、堂に入つたもので、昔とったキネズカに敬意を表する。小生も、齡三十才……などと、妙に若年寄振ることを、この際、止めにすることにした。

登攀終了点で、木村兄が、大切に背負つて来て呉れたカン・ビールで乾杯。

「ブラボーザ！」

なんて嬉しいんだろう。これでいいんだ、なんて、甘ちゃんになりながら、ガスの渦巻く頂上へと向う。

頂上で、またもや、乾杯する。何度もやつても良いものだ。藤島翁（針葉樹会報十三号に登場）の話でもちきり。

先輩、またまたケーブルにこだわる。さす

がに、しぶとい。先輩の言に従うという小生の方針に従い、ケーブルに便乗する。しかも、

先輩がケーブル代を出して呉れた。良い先輩だ。初めて、ケーブルに乗り、小生、年甲斐もなく、ハシャグ。ガイド嬢が、小生のみに（必要以上に）好感を持ったので、気分を良

くした。標高差八百米の由。

無駄な錢を、投資する人間と、そんなものに何時も頼る人間に想いを駆せながら、木村兄の安全、且つ、強引な運転に、再び身を委ねる。

ゲレンデとは言条、良きザイル・バーインにめぐまれたことに、満ち足りた氣持で、帰路についた。

滝谷四尾根の青春、荒沢での登攀、忘れられないザイル・バーインへの愛情、若手O・Bへの強い期待、そして、社会生活のことどもエト・セトラ……が、我がアバラヤを、なんと元気づけて呉れたことか。

とにかく、嬉しい週末だった。

山田亮三

中林栄三

況です。

七月二九日—三一日。
針ノ木岳、蓮華岳、七倉岳。

マヤクボを登つて小スバリのコルへ出、以下表記の山々を歩きました。針ノ木の峠路からマヤクボの雪渓を登りはじめると、トタンに下から声あり、「オジサン、そこは路じゃ

ないよう……」

くさりましたな。

路でないところは歩かぬ人ばかりの故か、マヤクボの上のお花畠は人一人いない静けさ、いゝ気持でした。

小生は相変わらずの小商人の忙しさの中で生活しています。こんど、蓼科に山小屋を手に入れたので、今年からは、もっぱら休みには高原慢歩しています。

伊藤恙生

三浦半島西岸の三戸浜へ行く。八月一五・一六日と雨、時々曇という好天?にめぐまれたが、家族全員の希望で一日滞在延期。一日一日間で身体中灼き、痛痒い今日この頃です。

岩崎利一

一昨年夏より、旅館・ホテルを二軒建て、全然ヒマなし。八月末にはホテルもオープニング予定で、経営が軌道にのつたら、大いに山の方を稼ごうと思っております。

久保孝一郎

但し、針ノ木小屋は百人をこえる超満員。ふくてくされて持参のブランデーを飲みすぎ、メシも喰わずに寝ていると、小屋主の百瀬の小母さんに発見され、俄然待偶が良くなり、翌日出発の時にカンピール二本貰う。テレビも時には役に立ちますな。

蓮華以南は人影少なく、悪くありません。七倉岳というのは、実に見晴らしのよいところです。唐沢岳という山に登りたくなりました。

石原脩

このところ山には御無沙汰しています。意欲はともかく、力も時間も目下は乏しい状

況です。

山と名のつくところは、昨年七月、ヨセミテからレーク・タホーへ抜ける時、九千呪とくのコルを通ったとき位。雪が残っていたの

スカウとした山の写真を撮りに、上越いでも行きたいと思うことしきりです。

無名氏

この頃、とみに腹が出てきて歩くといふことが楽でなくなつたので、夏山の前に奥多摩

『夏の便り』から

一 到着順

（略）

もっぱら釣道樂と庭いじりで自然に親しみ、バスを使わずに毎朝、浦和郊外の田舎道を三キロ程、全力で歩いています。

送られてくる会報は楽しみにしています。読んでいると、時折、頭の中では忘れたつもテルに変られた由、小生も時々これから御迷惑をおかけする予定故、よろしく。

小生は相変わらずの小商人の忙しさの中で生活しています。こんど、蓼科に山小屋を手に入れたので、今年からは、もっぱら休みには高原慢歩しています。

小生、今年はいつ何ということもなく、夏

を送ってしまった様な感じです。亡父の句集を出版するので、何回か校正を繰返して居るうちに秋近くなつたという次第。

スカウとした山の写真を撮りに、上越いでも行きたいと思うことしきりです。

伊藤恙生

三浦半島西岸の三戸浜へ行く。八月一五・一六日と雨、時々曇という好天?にめぐまれたが、家族全員の希望で一日滞在延期。一日一日間で身体中灼き、痛痒い今日この頃です。

山と名のつくところは、昨年七月、ヨセミ

テからレーク・タホーへ抜ける時、九千呪とくのコルを通ったとき位。雪が残っていたの

スカウとした山の写真を撮りに、上越いでも行きたいと思うことしきりです。

伊藤恙生

三浦半島西岸の三戸浜へ行く。八月一五・一六日と雨、時々曇という好天?にめぐまれたが、家族全員の希望で一日滞在延期。一日一日間で身体中灼き、痛痒い今日この頃です。

山と名のつくところは、昨年七月、ヨセミ

テからレーク・タホーへ抜ける時、九千

ヘテントで出かけ、全身これ汗というトレーニング

象的でした。

ニンクをやりました。朝八時頃だと大岳の頂上も誰もいなくて、これがあの混んだ奥多摩かと思われました。

いくらか腹がへつこんだところで後立山へ。レンゲ温泉から白馬大池へ。次の泊り場は天狗小屋付近。次は白岳小屋付近。こゝまでは天候にめぐまれて快適でしたが、次の日が雨致し方なく遠見尾根を下りました。小屋から下がケーブル工事とかで夏道が使えず、ドロンコの冬道で、全く腹がたつてきました。

今の所、これ以上腹が出ないよう、せいぜい運動（体操を含む）量をへらさないよう
にと思っています。

(補足) 後立山は七月三〇日—八月三日。

奥多摩は七月一六・七日。いずれも会社の連中と。(ハガキに差出人記名なし。一体、どうなたでしょか?)

小泉三好

例年のことながら、名古屋の暑さには参りました。社業多忙で、北に南にと走り廻るばかりで、人並みにバカンスをとり山に行くこともできず、又、両夜行立ち通しで行く元気もちょつとありません。今夏唯一のレジャーは子供をつれて伊良湖岬に行き、岸壁によじ昇ったり、海にもぐって魚をとったりしたと位です。

六月に生まれた息子の世話と、たまつた仕事（論文書きと翻訳）で、一夏終ってしまいそう。女房と二人だけで育てねばならぬので一人だけで山にでかけるわけにいかず、やむをえず下界にチンドン。夏、何処にも登らぬのは、十年来の出来事である。かかる状態で山の便りを聞くのは実につらい！

石弘光

友人と念願を果しました。

王滝口は今年から六合目の田ノ原小屋まで木曾福島からのバスが開通したので、精々四時間程の登りで剣ヶ峰に着き、頂上の小屋に一泊。翌朝も快晴にめぐまれて、山頂の展望は申し分なく、快適な山旅でした。

鈴木克夫

近藤恒雄

去る十七日から、村尾君と有峰湖から登つて、太郎小屋を振り出しに、薬師、上の岳、黒部五郎、三俣連華、弓折、抜戸、笠ヶ岳を通つて、昨二十二日帰つて来ました。久し振りの北アルプスを楽しんで来ました。尙、同行には藤島氏や三辺君も一緒で誠に楽しい山旅でした。

柿原謙一

一年振りに雲取山に登る。原生林の中で、清水を飲む。昨年ベンちゃんと会った道で、今年は誰にも会わなかつた。

高橋要二

昨今業務多忙にて全然山に登る機会なく、飛行機の上から、アフリカの山々、マレーシヤの山々を眺めたにすぎません。今度やっと八月一日十三日に休暇をとり、東京からハンドルをにぎり、福島経由、信夫高湯に二泊、裏バンダイの湖を探りました。吾妻スカイラインは全くの霧で、ヘッドライトを照らし走る始末でしたが、特に五色沼の美しい色が印

きつつきの音はいづこぞ登山道

拙宅、海には、AT STONES TH ROW です。夏は専ら泳ぎを楽しんでいます。

山元淑弘

九月には越後荒沢岳—中岳—越後駒の縦走を考えています。新潟県境には、北は朝日連峰から南は雨飾山まで、楽しそうな山々が連なっています。東京に帰るまでには、全部歩いて見たいと思っています。人の居ない頃を見計らって、山ろくまで車で行けるのと、降りてくると何処かに温泉があり、疲れを癒やせるのが結構なのです。

村上泰介

永く広島に居たものですから、さっぱり山に疎遠になってしまいました。時折、比良あたりの山を歩く程度です。

三日間の夏休みをつくって、先だって岳沢へ行つてきました。生憎と連日の雨で、奥穂へも登らず下山、上高地ではバスターミナルの行列に閉口して、ことこと徳本を越えて帰つて来たような次第です。松本の「サンモリック」で連絡ノートを楽しく読みました。

今度の元旦の休日には積水の本間兄と、早月尾根をつめてみる計画を立て、装備をあら

かたそろえました。アイゼンのツアツケをみがいていると、休養と栄養と教養の学生生活がなつかしくなつたりします。

薄曇りの中剣沢三田平へ入山。水場、キジ場等設備は非常に改善されている。十五日、同行の女性二名つれて、ガスの中本峰往復。女性はそのまま下山、夜中風雨強まり、一人ボーグにしがみつく。

鈴木肇

八月十三日、藤村の馬籠へ。馬籠峠—妻籠峠—清内路峠—清内路。十四日、清内路の盆踊り。十五日、飯田へ下り、小渋川に入り鹿塩鉱泉へ。十五日、再び木曾路に入り木曾駒の麓へ。十六日、木曾福島の手打そばを楽しみ、帰阪。

家内、長女（中学二年）、次女（小学五年）、伊奈にすっかり魅せられ、口の方も鰯、とうもろこし、五平餅等々、山の幸に大満悦。来る冬と来年の夏の計画が帰りの車中を賑わせた次第です。

竹中彰

今年の夏山は二度計画しましたが、いずれも天候が災いして何も出来ませんでした。

(その一) 七月十六日—十九日、新穂高—槍

平—槍ヶ岳—槍沢—上高地。

当初予定はキレット越え涸沢までだつたが、飛驒乗越へ上つたとたん、ガスと強風に迎えられ、予定変更して肩の小屋へ逃げ込む。

(その二) 八月十四日—十六日、室堂—別山

白毛門より笠ヶ岳の登り
倉知敬撮影

◇表紙写真◇

五日に事務引継ぎを終つたので（望月氏は此度、大井証券に勤務先が変更になりました—編者注）、六日から十二日迄、黒四ダム—立山—五色原—薬師—黒部五郎—三俣連華—双六—蒲田と、連日快晴の夏山を満喫してきました。山歩きの方は、今後どうなるか目下のところ判らぬが、仕事が変わったからと云つて、こちらの人間が急にかわるものでもなく、また月に一日や二日の山歩きが出来ない訳でもなかろう。できるだけつゞけるつもり……。

望月達夫

鳥帽子沢奥壁

大賀二郎

(一)

上野に行つてみると、原と岡田君（四年）が窓から手を振っているのに、高崎はいない。

「今朝高崎さんのお母さんから、俊平は昨夜でかけました、ってデンワがありました」と、岡田君が云う。

針葉樹会日産支部（？）は、組合の創立記念日に会社が休みになるというこの会社らしいしきたりを利用して、一ノ倉に出かけることにした。支部長大賀（ヤロー会）、支部員原、高崎（いずれも道程会）の三名、八月廿八日の夜行で発ち、エボシ奥壁を登る計画だ。

休みは廿九・三十日連休だが、家を空けるのをなるべく少なくしたいというゴキブリ支部長の意向で、廿九日中に帰る予定にした。

「それには、南稜を降りなきや、時間的にムリですよ」原が云う。この夏、穂高で倉知が原たちに屏風の中央カンテを下られ、「こんなとこアップザイレンするのか」と云つたら軽蔑したような顔をされましてね」とボヤいていたのを思い出し、

「まあ、行つてみてのことにしてようや」とお茶を濁しておいた。

さて当夜、連休前の変則勤務と多忙に疲れたぼくらは、廿九日の昼にでることに急拠変更の電話連絡を取りかわした。そして翌日、

「でかけたつて、一人でどこへ行つたんだろう?」ぼくがケゲンな顔をすると、原がニヤニヤしながら、

「大賀さん、俊平は行きたいところへ行きますよ」と云う。

「そんなものかな……。で、君らはどこへ行くんだ? 君らの乗つてる箱は、籠原止りだぞ」

やがて、暑さにうだつた鈍行が土合に着く

と、二年生の宮武君が待つっていた。お母さんと肩の小屋まで登つてきたという。大したも

のだ。お母さんには一人で帰つてもらい、岡田君と、これから来る加藤君（三年）と三人で南稜を登るそうだ。

「今朝、高崎さんに会いましたよ。一人で

白毛門に行くって」と宮武君が教える。しかし、下りてきて合流するつもりなのか、支部の統一を乱すつもりなのかは、誰にも分らなかつた。

不承不承鳥帽子のスラブを登る内、ガスは晴れ、衝立正面がのしかかるように姿を現わした。逃げる理由はなくなってしまった。

七時二十分、原がトップで、中央稜と南稜

山は秋の気配だろう、とは思つていたが、期待にたがわず、風は乾いて冷たく、澄んだ空にかかる白雲も優しかつた。堅炭岩の数個のピークがなつかしい姿を見せる。

（岩登りをやめてから、三年たつな）と思う。三年前の十月、懇親山行で一ノ沢に登つたのが、バリエーションに取組んだ最後だった。長い中断のあと、再開のオ一步を、同じ一ノ倉で踏み出すのは嬉しいものだ。

「この角を曲ると、一ノ倉が見える」誰にもなく呟く。そして次の瞬間、四人が一斉に声を上げた。意外なほど、残雪がゆたかなのだ。

翌朝は霧だった。怯懦の心が、味方を見出人の中で登る約束だぞ」

「俺は、何にも見えない岩登りなんて、大嫌いだ。高崎はとうとう来ないし、大体、三

人のまん中で登る約束だぞ」

しかし、年寄りにはゴネさせておくさ、といふ顔でニヤニヤしている原には通じなかつた。不承不承鳥帽子のスラブを登る内、ガスは晴れ、衝立正面がのしかかるように姿を現わした。逃げる理由はなくなつてしまつた。

テラスのはば中央部に取り付く。階段状のし

喰べられない。

つかりしたフェースを二ピッチ半で、変形チムニーに入る。大賀がトップで登りかかるが、ヘーピック階段を上ると、三本枝のテラスにあつさりあきらめ、原にやつてもらう。チムニーの入口で確保していると、原の位置が段々前方へせり出していく。器用にザイルシユリングを使いながら、とうとう落口のハングを越え、見えなくなる。

「山本さんが、ザイルを垂らすと岩から三米も向うに行つちまつた、って云つてたのはここかな。」「話半分とすりや一米半か、丁度そんなもんだな。」

(三)

変形チムニーの上の凹角はぼくがトップで行つたが、碎石ルンゼへのトラバース点を通りすぎたことに気付いて、十米ほどクライムダウンする。原は、ぼくが下降したザイルを使って右に振子トラバースし、碎石ルンゼに入る。ぼくも後続し、時計を見るともう十一時。疲れた。からだの芯から力が抜けた感じだ。(もつかな、終りまで)自問する。しかし、あれこれ考えることすら面倒な気がする。昼食をとろうにも、ツバは乾き切つて、何も

碎石ルンゼを少しノーザイルで進み、右上ト唯一のテラスらしいテラス」だが、積雪期はいざ知らず、今朝から休むたびにこの位のテラスにはお目にかかる。」「一の倉の伝説」と誰かが云つたのもムリはない。あり余るのはテラスだけではない。ハーケンも、ボルトもだ。テラスのまわりがリストナースラブでも、ちゃんとボルトが打つてあるから、セルフビレーには全く心配がない。登るのにも、十分なハーケンにザイルを通して、余ったハーケンにはカラビナや紐をかけてホールドにする。よんど困まれば三段アブミだ。

それでも使つた三段アブミの上でもたつき、やつとの思いでハングを越したのはお粗末だったが、あるものは使おうとばかりに、ためらいつもなく紐を使いカラビナを使い、十ピッチ壁ヘルートをつなげて伸ばすのは、今後必須の方向ですよ。その訓練のためにも、南稜を下りましよう。原も持論を曲げない。

「だからって、頂上に行くばかりが能じやないでしよう。難しいルートを登つて易しいバリエーションを下りることで、岩壁から岩壁ヘルートをつなげて伸ばすのは、今後必須の方向ですよ。その訓練のためにも、南稜を下りましよう。原も持論を曲げない。

「とにかく、あんな元気な連中と上へ行くのは、しごかれてたまらないな。」

その時、ぼくらが碎石ルンゼで追い抜いたパーティが現われた。そして、議論どころか休みもせず、いかにも通いなれた風情で、さ

懸垂岩の下で、南稜を抜けてきた岡田君たちに会う。水がないタバコがないと云いながら、キヤツキヤツと騒いでいる。うらやましい若さだ。若さにまかせて、一ノ倉尾根をつめ国境稜線を辿り、西黒尾根を下つて土合でぼくたちを待つと云う。

「先きに土合に着いてたら、駅前でビールをおごってやるぞ。」原が云うと、三人、

「ほんとですか?」と目を輝かした。

ぼくの持論から云えば、岩登りは山登りの一小部分にすぎない。山腹を中程までチヨロリと登つてチヨロリと下りるのは邪道だと思

つさと南稜を下り始めたではないか。どうやら、常識はそういうことらしい。

アップザイレンは、南稜最終、最悪のスラブから始まる。原のはゼルブストのカラビナを利用したスマートな懸垂、ぼくのは古典的な肩がらみだ。八年前に初めて南稜に取り着いたとき、セカンドなのに死者狂いで登ったこの逆層のスラブが、そして、バックアンドファットを覚えた次の外傾チムニーが、半空中懸垂の靴底を通り過ぎる。三年前の二度目のとき倉知と楽しんだ中間部のナイフリッジは、ノーザイルでクライムダウンだ。南稜テラスを覗く最後のフェースは、二十米づつ三回のアップザイレンで丁度終る。一ノ倉はすっかり日かけに入り、静まりかえって誰もない。湯檜曾川の対岸に、白毛門が高く空を切っている。

「不可解なり、俊平。」思わず呟きが出た。秋色ただよう岩壁を振り返り振り返り、テールリッジを下っていくと、まがりなりにも登り了せたときのあの満足感が、じわりと胸に浮かんてくる。同時に、明日からのラクではない勤めと家庭生活が一步ごとに近づいてくるのが分る。夏もう終りだ。しみじみと思う。(来年の夏は、俺も三十になつている)と。

夏 の 穂 高

倉 知 敬

八月一日から六日まで、徳沢を根拠地にして穂高の岩場に親しむという、学生時代以来の楽しい山の生活をおくる機会にめぐまれた。参加は、OB一年生の、原、高崎、佐藤(之)、なかつたのだが、同時に、またオレだってまだ負けないゾ、というファイトが湧いての計八人だった。

高橋とぼくの二人は、もうこれでも卒業してから四年目だから、去年卒業した連中とは

いわば一世代へ大学生活四年を基準として

が山の新兵だった頃、少しばつつき合った経験はあるものの、こうして一人前の山男になつてから一緒に登るのはこれが初めてだったか

ぼくも、岩登り技術の質から登山に対する考え方までいろいろな点で、いささか事情が変わっているな、ということを悟らざるを得てきているな、ということを悟らざるを得た。つてきているな、ということを悟らざるを得た。なかつたのだが、同時に、またオレだってまだ負けないゾ、というファイトが湧いてきて、最近シリツボミ氣味の自分の登山に活動をいれることができたような気がするのである。

さて、前がきはこれ位にして、この時のようすを少し書いてみよう。

八屏風岩・中央カンテ✓

徳沢は新村橋付近の河原にテントを張った翌日(八月一日)の行き先に、まず入山の小手調べに、といつて選んだのがこの中央カンテである。メンバーは佐藤(之)、佐藤(久)、原、という現在のいわば一橋山岳部のエースといつてよい三人と、不肖私である。一昔前は、中央カンテといつたら、一寸したものだつたが、今では「まあ、この辺では(徳沢を

拠点にしたら「楽な方」といわれる部類に入るのである。

ところで、この日もう一つ出たパーティは高橋、高崎、平川の三人からなる、滝谷オーナー尾根P2ランケ隊であるが、徳沢から初日にはるばる滝谷まで岩登りに往復するというのも、あまり普通でないような気がする。(まあ、これは色々事情があったのだが――)。

さて屏風岩東壁のふもとまでいって、一ルンゼの出会いあたりまで登つてみると、まだ朝も早いといふのに、岩壁はものすごい混雑である。もちろん夏の縦走路のようなものすごいものではないが、東稜1、東壁、雲稜ルート3、縁ルート1、取付に2し3パーティその下に2ペティ、それにすぐ手前で休んでいる数人、というのは单一の岩場にしてはかなり多い方だろう。今更のように、この屏風岩という岩場の人気に驚かされる。

あわよくば東壁を、とねらつっていた我々は(正確にはぼく以外の)、あっさりこれをあきらめ、岩壁のそを回つて中央カンテへ向つた。

中央カンテは、傾斜こそ急ではあるけれど、そのほとんどがヤブでおおわれていて、アク

や降路に使われているのですヨ、「」という位で、全然人影もなかつた。たしかに、草付のバンドを伝つて登るルートは、ホーリドもし

っかりふみ固められていて、かなり昔よりやさしくなつていて、岩場が縮んだり傾斜がゆるくなつたわけでもなく、今日でもやはりスケールの大きいつばなルートである。

夏の日のカンカン照りに閉口しながら、ぼくらはふみ跡をたどつて急崖をどんどん攀ぢ、ほとんどの岩壁の高差の半分位をノーザイ

ルで一気に登つた。今まで、岩場で他人に遅れをとるようななきことはなかつたつもりのぼくだけれど、三人が有無をいわせずどんどん登つていつてしまふについ

ていい。その口惜しいこと。まだ勘が慣れない怖さもあって、ハアハアいつてやつとテラスで追い付くと、「割と早いですネ」とか何とか云われたように覚えている。

△前穂東壁・松高ルートと右岩稜▽

彼等は在学中、奥又白の岩場は全員、殆んどのルートを登りつくしているそうで、あまり興味をしませぬが、ぼくとしては、表記の2ルートを登れば殆んど全部登つたことになつた。そこで、「一度登つたことがあるので、これを登ることは前から予定に入れてあつた。そこで、「一度登つたことあるけれど、まあ、足ならして、」といふ高崎君ではなく、巨大な、ブッシュまじりの垂直な岩場につづくバンドに出るが、ここで、ルートはどうやら中央カンテのそれではないらしことが判り、その上を乗り越えるのはあまり樂でないもようだし、二、三度試みては見

たものの、はたさず、他に適当なルートも発見できなま、やむなく引きかえすことにした。

それから我々はアップザイレンを数回くり返し、往路を下つたのであるが、こうした退却の場合、何の抵抗もなくアップザイレンにうつれるというスマーズには一寸感心するところあつた。

何事にしろ、各自が自分のことは自分でし

てなお余裕あるという状態で事を運ぶのは気持よいことである。

める。一時間程でそれは登り切り、右へトラ

ベース氣味に前穂北尾根四峰に向う。5・6のコルから涸沢の連中がゾロゾロとやって来て、奥又もかなりのにぎわいを見せる。

久しぶりに間近かに見る四峰正面岩壁は、考えていたより小じんまりして、いかにも明かるい感じをもたせる。五年ほど前、この正面壁の新村ルートを登った時には、このルートは相当な所だ、という観念があつて、一寸した偉圧感をもたせたし、登っている最中も一種の不安感みたいなものを感じていたものだが、今や、そんなものの片りんも感じさせない程、いわゆるゲレンデ化した雰囲気があり、又事実、やさしくなつていて。

固いホールドをがっちり握って、グイグイと登る、という形容をしたら、この時の岩登りの感じがもつともよく出ると思う。この松高ルートの核心のオーバーハング帯は、アブミは使う程のこともなく、足を突張つて片腕で体をささえ、もう一方の腕で上のホールドをグイと握り力いっぱい引っ張れば、登れてしまう。

ぼくらは、ツルべで交互にトップ交代して、一時間半程で、これを抜けた。空はカラリと晴れ上り、岩は乾いていて、まことに氣

持よい登攀だった。

さて、四峰頂上で昼メシをとった後、3・4の雪渓を下つて、予定通り右岩稜にとりついたのが、まだ十二時頃。真夏の昼下りとあれば、この岩登りのメッカ・前穂東壁かいわいには、殆んどのルートに登山者が取り付いていて、ハーケンの音、交す声、そして落石の音、女のヤサシイ声までコダマして、正に宴タケナワ、といった感じだった。

右岩稜というのは、殆ど垂直な一枚岩と、オーバーハングのクラックとの、それぞれ三〇米位の2ピッチが核心部であるが、これを

越えるのに、約一時間程。ここも浮石は整理され、ハーケンは数多く打たれており、登るに見かけ程の難しさはない。

この数ある残置ハーケンに、忠実にザイルを通していくたら、ザイルが滑らなくなり、ことだつた。

「以前登った時にはザイルを通さなかつたで

すヨ」と相棒にいわれ、そういうものかな、と思う。だが、何だか不安が先に立つて、それでもやはり極力ザイルは通して登つた。

見ていると、彼等は、岩場にハーケンを見付ければ、ザイルを通すより、これにカラビナをかけてホールド代りに使う傾向がある。

ぼくの常識でいけば、こういう使い方は原則

的に邪道であつて、岩登りは極力補助的手段を使わずに、手と足だけで登るべきであり、ハーケンは確保用に打つておく、というのが根本的精神である。カラビナを握り、これを取つかえ付けかえ登つていくやり方を見ていれば、この岩登りのメッカ・前穂東壁かいわいには、殆んどのルートに登山者が取り付いていて、ハーケンの音、交す声、そして落石の音、女のヤサシイ声までコダマして、正にぶつても登れるといいたくなる程、やさしくなつていて。とにかく、腕をのばせば、そこに格好なホールドが待つていてるという具合だつた。

最後にAフェースを登つて前穂の頂上へ達したが、このAフェースに到つては、目をつぶつても登れるといいたくなる程、やさしくなつていて。とにかく、腕をのばせば、そこに格好なホールドが待つていてるという具合だつた。

しかし、何はともあれ、少々やさしくなつたといつてもこのスケールの雄大なる前穂東壁は依然素晴らしい岩壁であり、この日一日充分岩登りを楽しんで、気嫌よく山を下りたことだつた。

△明神五峰東壁▽

佐藤(之)、原、石田、とぼくの四人で、最後の日(六日)、明神に登つた。

明神東面の岩場というのも、また一風変つたところである。これほど上高地に近い所にありながら、どうして夏山最盛期といえどあんなに静かなのだろう。何しろ入っ子一人居

ないのである。明神池の養魚所を出てから戻つてくるまで、ぼくらが出会つたものといえば、何と、カモシカ一頭であつた。

このカモシカ氏、下手をすれば上高地の雜踏も聞こえてこようといふこの明神かいわいに住んでいるには、あまりにも場ちがいな程原始的な趣きがあつた。これを見て「この辺や六百山付近にはかなりカモシカが生息しているそうだヨ」と、したり顔に奴がいたが、案外そういうこともあるのかもしれない。このカモシカのみならず、この明神東面の、静寂の中に沈んだような這松の海や、切れ切れに現わす岩壁のたたずまいには、妙に人の心を引きつける山の良さのエッセンスみたいなものを感じる。

さて、明神五峰東壁を登るには、池から下宮川を経て宮川のコルに登り、急なガレ場をつめて、東北稜との蔭にくほんだ中央リンネ（ワデ宮川の源流）に入る。それを二百メートル登ると、大きなハング帯にぶつかるから、これを右側からまいてハングの上に出、左にトラバースして戻ると、広々したカルボーデンに出る。そしてこの上が巨大な奥壁となつて五峰頂上までつづいているのだが、下から見ると何でもない草の生えた斜面に見える。

これが登つてみると仲々どうして大きく急な峰東北稜というのを登つた時、この東壁を見たことがあつたが、冬にはこの壁は一面の氷壁となつて、正に壯觀であつた。

この日ぼくらは、カルボーデンに出るのに、下のハングの乗越の所で二ピツチ程ザイルを使つただけだつたが、かなりの高差があるだけに思つたより時間をくつてしまつた。

だが、あとの奥壁は大したことあるまいとたかをくくつて、ゆっくり昼食をとつたあとおもむろにそれに取り付いた。ところが意外に傾斜は急だし、岩が非常にゆるんでいて浮石が多い、これは大変だぞ、ということになつた。

そこで本来なら、必死になるところだが、や浮石が多いことで、登攀対象として決して好適という訳にはいかない。また登つた所がどうも正常なルートからはずれているらしい。結局、やめて置こう、ということになる。一匹チ登つたところからアップザイレンで、カルボーデンに降り、あとは東北稜に取り付いて、それを頂上までたどつた。

これでここは終しまいになるかと思ったら、これが登つてみると仲々どうして大きく急な峰東北稜というのを登つた時、この東壁を見たことがある。ぼくは、以前、冬にこの右側の五気にかかる、またいざれやってやろうといふ氣が時がたつのにつれ強くなってきたので不思議である。この壁の奥深く残されたような寂しいたたずまい、非常に素朴な、いわば原始的な岩場、であるところが、そうさせるのであろうかと思う。

佐藤たちは、この東壁か、となりの中央壁（赤壁とも呼ばれる。ペロンとした一枚の壁で中央に巨大な洞穴を持ち、東壁より難しいといわれる。）を、この冬登りたいと云つておもむろにそれに取り付いた。ところが意外に傾斜は急だし、岩が非常にゆるんでいて浮石が多い、これは大変だぞ、ということになつた。

この他にも、原と佐藤（之）が屏風岩東壁の鵬翔ルートを登つたり、平川が単独で霞沢岳の八右エ門沢を登つたりした。原たちはそこの時、時間をくつて夜中の一時頃やっと帰つてきたというものがすごさだったし、平川の方も相当暗くなつてから帰つて來た。前に述べた滝谷行だつて、ずい分大らかにやつて來た。いずれにしても、皆、のびのびと夏のバカンスを充分楽しんだことであった。

会務報告

中島 寛

一、懇親山行について

今年度第一回の懇親山行として、九月十五日～十八日、大樺沢二股にテントを張って、北岳バクトレスの登攀と北岳登頂を目的とした合宿をもつた。

△参加者▽村尾金二、近藤恒雄、山田亮三、山本健一郎、中島 寛、倉知 敬、高橋信成、小島和人、佐藤之敏、佐藤久尚、岡田健志、田沼行雄、加藤正巳、中村雅明、宮武幸久（以上五名は学生）、その他に特別参加として日本山岳会員藤島敏男、合計十六名。

天候悪く、晴れたのは初めの二日だけだったが、全員大いに張りきり、第三尾根、第四尾根を登った。戦前卒のOBも、近藤・村尾生輩が八本歯のコルから北岳登頂、山田先輩はオ四尾根を登るなど、大いに気をはいた。（詳細は次号掲載の予定）

なお、甲府の駅では丸茂さんが出迎えて下さり、ブドウとウイスキーの差し入れを

受けた。

今回は電話連絡の他に五〇名の会員に案内を出したが、返信を見ると、一月前位に通知があると都合をつけやすいという声が多くった。

そこで、今後の懇親山行スケジュール（年内のみ）をお知らせしておきますので、参加希望者は、電話でも手紙でも、幹事宛お申し込み下さい。

(1) 奥秩父、笛吹川東沢

（十月二十二日（土）午後発、二俣小屋泊。十月二十三日（日）東沢遡行）

東沢には、昭和十六年秋、前田、長沼、古沢三名の部員が遭難死するという思い出がこめられている。立ち消えになつてゐる遭難碑の建設を今度こそ実現したい。

(2) 富士山（十一月十九～二十三日）

この間、学生が五合目佐藤小屋付近でテントを張っているので、各人都合のつく日程で入山する。

二、会報の発行について

“年六回発行”という看板をかかげて大見栄をきつたものゝ、内心大変心配していたが、会員各位の協力で、何とか六月、七月、九月と順調に進んできた。

この上は、このベースを崩さずに、さらに内容を充実させていきたいと考えているので、山行記録、紀行、隨想、近況報告等気軽に原稿をどしどしお寄せ下さい。

三、海外遠征計画について

昨年、正式に決定をみた一橋山岳会としてのカラコルム遠征隊派遣の件は、三名の先遣隊を派遣して、かなりつっこんだ交渉まで試みたが、不幸にも印パ戦争に遭遇して、許可がおりないまゝ、一年延期のやむなきに至つた。

本年に入り、四月に、昨年と同じ内容で登山許可申請書をパキスタン政府宛提出、昨年度先遣隊が手がけた交渉ルートをたどつて、許可を得るための地道な交渉を継続する一方、山本隊長を中心に、毎週一回の計画全般に亘る検討会を重ねてきた。一方、去る九月十四日に行なわれた日本山岳協会の海外登山審議委員会において、

我々のカラコルム遠征計画に対する外貨割当（一〇、〇〇〇ドル）が許可された。

四、都岳連への加盟

去る六月の総会で加盟することだけ決定して、加盟の時期と方法については後日にもちこされ、本件については、その後、幹事の方で諸情勢を総合的に検討し、海外遠征のための外貨割当を受けるため、その前提としても、加盟の必要が生じたため、八月二十二日、正式に一橋大学山岳会として、針葉樹会と一橋山岳部が一体となつた形で加盟した。

五、住所変更、勤務先変更

金田近二（名譽会員）

勤務先・名古屋市東区大幸町一〇ノ七

名古屋学院大学

大賀二郎（昭三六卒）
勤務先・日産自動車株第三購売部
第三部品課

全国どの支店でも結構ですから、三井銀行か協和銀行の支店へお立ち寄りの際、「三井・日比谷、又は協和・丸ノ内の針葉樹会（代表山本尚禎）へ振込んでくれ」といって払い込み下されば、届きます。
会費は

昭和三一年以前卒業者 二〇〇〇円
〃 三二年以後 〃 一、五〇〇円

です。どうかよろしくお願ひします。

（山本尚禎記）

勤務先・千代田区内幸町二 飯野ビル内
三井物産株、ソ連東欧部織維課

澤木一夫（昭三四卒）
勤務先・電話番号変更

（五〇一）五三八一

（五六二）三二一一

岡垣治雄（昭三三卒）

住所・川崎市下小田中下東一四八九

◎会費を納めて下さい

宮城賢三（昭三五卒）
住所・神戸市須磨区須磨寺町四ノ二〇
台糖アパート内

勤務先・神戸市長田区東尻町九ノ一

台糖株経理部

例年のように、今年もまた相変わらず会費の集まりが悪く、会報発行の費用すら怪しくなってきました。どうか会費を納めて下さい。

此度、三井銀行日比谷支店にも、普通預金の口座をもうけました。（あ412-1274）先号でお知らせした協和銀行丸ノ内支店と合わせてご利用下さい。

上田駿策（昭二六卒）

住所・港区麻布桜田町三一

（四〇八）五九七五

勤務先・電話番号変更

（〇七八）（六七）七四九一

望月達夫（昭十三卒）

勤務先・千代田区神田司町一ノ七

大井証券株（二九一）二三二一

勤務先・伊藤忠商事株東京支社

輸出鉄鋼部第二課

勤務先・電話番号変更

望月敏治（昭二四卒）

勤務先・電話番号変更

カラコルム遠征先遣隊報告・その2

佐藤之敏

四、パンシールに沿つて

——キヤラバン——

八月十二日、朝九時、我々はやっとカブールを離れて山に向けて出発することができた。日本を出発してから実に三週間。今回のような二ヶ月程の軽遠征隊にとって、この山に登る前の三週間のロスは全く痛い。ところで、カラチの三井物産支店の関口氏が丸子の旧知の仲ということで、特別参加で、ベースキャンプまで同行することになった。それに、英語||ペルシャ語通訳の、アフガン人のナジ卜ラ氏。この先生、その英語たるや、生来の、どもり癖と相俟つて、はなはだ心もとないがこの際、他に適当な人かいなかつたので、一ヶ月、七千五百アフガニ(約三万七千五百円)也のアフガニスタンでは最高レベルの賃金である。

ご同行願うことになった。

さて、我々当初の目標は、中央ヒンズークシュの最高峰、コ・イ・バンダコール(六六〇〇米)の登頂にあつたが、どうもこの山の周辺にコレラが発生した模様で、具合が悪くなつた。最初の内は、どうせ大したことはあるまいと樂天的だったが、国連の世界保健機構の派遣員が、コレラの症状、その死にざまを、克明に説明するに及び、あつさり我々は

目標を変更した。恐らく、この三人の男の脳裏には見知らぬ土地の、しかも山の中に、脱水症状を呈して、カラカラにしからびた己れの死骸が、ころがっている光景があつたに違いない。こうして、カブール出発三日前に急拠目標を、ミールサミールに変えたのである。しかし、ほとんど何の予備知識も無しにでありますそこで、メロンとか、ブドウを、しこたま買い入れた。

この村を過ぎると、ジープはいよいよパンシールの谷に入り、細い危険な道を行く。途中、幾度か遊牧民に出会つたが、その度に、のろのろ道巾一杯に歩く羊の群が、我々の前

進をはばんで、初めの内は物珍しかったものの、最後には、いらいらしだした。狭いジープの中を、途中で買い入れた数個のメロンと共に、ゴロゴロ、ガタンガタンゆすぶられ、埃りまみれになり、いい加減参つてしまつた夕方六時頃、夕闇せまる、フルンジュという村に着いた。我々はその先のダシュトリバットまで車で入りたかったが、フルンジュの村人達の話では、これ以上先は、車では危険であるから今日はフルンジュに泊り、翌朝この村からロバ・馬を雇つてキャラバンを出発する様にということであった。我々はこれまでの経験からして彼らの話を、まともに信じ事ができなくなつていたので、一台のシープで彼らのいう危険な箇所というのを見に行つたが、確かに幾分危険ではあるが、通つて通れない所ではなかつた。

彼らの魂胆は見え正在している。要するに、現金収入の少ない彼らにとって、我々外国人が村に落とす金は馬鹿にならないのであり、彼らが自分らの村に泊まる様、熱弁を振るうのも無理な話ではない。我々も、この埃りっぽいお世辞にも快適とは云えないドライブに、いい加減参つていたので、まあ良かろうといふ訳で、意外とあつさり彼らの軍門に落ちた。

暗かりの中をランプで導かれて入つた家は全くの泥造りで、わずかに骨組みだけは木を使つてあるらしい。我々の通された部屋は二階の一室で、それでも珍客用の立派な部屋らしく床には一面にシュウタンが敷きつめてあった。一息ついて囬りを見ると、次々に色々な連中が物珍しそうに部屋に入つてくる。それ程明かるくもないランプに照らされて、むづづり黙りこくつた連中が我々をじつと見つめる表情の中に、我々は初めの内、何か一抹の不安を感じた。

我々はまず初めに、明日からのキャラバンに使うロバや馬の使用賃を決めてしまわないで、と安心ならないので、早速それにとりかかつた。これはやはり案じていた通り、難波を極めた。去年のドイツ隊の例によつて予定していた馬一頭一日につき八〇アフガニ、ロバ、四〇アフガニを、はるかにオーバーして、馬百五〇アフガニ、ロバ七〇アフガニだと抜かれた。我々は通訳を混えて、あらん限りの知恵をしぼつて大巾なる賃金値下げを計つたが

かしてみたものの、所詮は「足」を持っていける者の強みと「足」を借りなければならぬ者の弱みの違いは、いかんともしがたいものだつた。金の事で険悪になりかかつた雰囲気も、話が決まって、食事の段になり、序々に打ちとけてきた。

彼らの主食は、小麦粉をこねて焼いた、ノンと呼ばれるパンの一種で、形は直径三〇cm位の円形をしている。ほとんど何の味もないが、それだけに比較的、清潔感もあって、紅茶を飲みながら食べれば結構いける。

ところで、いよいよ食事も終り、寝る前に用を足したく思い、その旨を告げると、ランプをさげて、その場所に案内してくれたが、そこは何と裏庭の真中で、勿論、何の匂いもない。どうも彼らの生活には、トイレ等といふ氣のきいたものは無いらしい。まあ、それは良いとして、折からの快晴で月の光りがこうと輝る中を、付き添いの者は、物珍しそうに見守つていて、一向にその場を去ろうとしない。『シイツ シイツ』とばかりに追払おうとするも一向にその場を動こうとしない。こちらもじれつたりなり、ままよとばかりに『事』に取りかかってしまった。そもそも彼らには紙を使う習慣などは無い。即ち、

その場に及んでは、適当な石コロを探し、その石コロの、これまた適当な角を見つけて処理をする訳で、その辺りにはそれらしい石コロが、ゴロゴロしていた。

そういうえばバキスタンのカラチの公衆便所にも、そこら辺に、小さな石コロがゴロゴロしていたもんだ。今から思えば、あの月明りの下で、ターバンを巻き、ランプを手にさげた男に見守られながら、不愉快な顔をして、用を足しているその姿の、何ともはやさえないことよ。

明けて八月十三日、いよいよ我々のキャラバンの才一日目が始まる。成人の女を除いてほとんど村中の全員が我々の姿を見ようと集まってきた。首都カブールを除いた地方ではどんな珍客が訪れても、妻が姿を現わすことは、非常に稀である。女の姿が、ほとんど見られないということが、どんなに面白くないか等という事は、一寸日本等においては想像できない。どんなに一見、色氣の失せた様な老人でも、銀座を歩いてみて、自分の視界の中に、到る所、女性の歩く姿を認めれば、そこに男だけがぞろぞろ歩いている場合と比べて明瞭な心的差異があるはずである。

ロバ七頭、馬一頭に荷を乗せ、もう一頭の

ロバには隊員が交代で乗ることにして、我々は出発した。ミルクコーヒー色をした禿山に両側を囲まれた谷筋の道を我々のキャラバンは進む。実にのんびりした愉快な光景である。

幾分腹の出かかった、我らが隊長が、小さなロバに股がり、地面に足がつかんばかりにしてユラユラと進む様は、まさに喜劇的でさえある。もつとも二〇貫の隊長に乗られたロバの小さな目は実に悲劇的ではあつたが。道はペンシーハの谷筋を、時には河面すれすれに、時には、はるか千米下に河を見下ろす急斜面にかろうじて形をとどめている。途中、幾度かラクダに乗った遊牧民に出会つた、彼らは、ソ連との国境近く、いわゆる最も中央アジア的な雰囲気の強い土地から南のジャララバードへカブールの東にあり、冬でも暖かい)まではるばる移動している人達である。

十四日、カウジヨンという村に着いた。この地より我々は、目的の山ミールサミールより源を發し、パンシール谷に流れ込むミールサミールダリオ(ミールサミール谷)に入る。このカウジヨンの高度は二千六百メートル、フルンジュは二千三百メートル、全く非能率なキャラバンで高度の上昇は全く遅々たるものだつた。このミールサミールダリオの入口からミールサミールの頂上まで実に高度差三千五百メートル、ここからも雪を冠した頂上の鋭く

とがつた針峰が見えるが、果してこれがミールサミールのご本尊か、或るいはその前衛峰か、はつきりわからない。

八月十五日カウジヨンを出発、道はいよいよけわしくロバは恐怖におののいてなかなか思うように登つてくれない。急な岩場にさしつて前から両耳をもつて引っ張つたり、尻を掛けるとロバは全くシユリンクしてしまってロバの付添いの現地人と我々隊員は必死になつて頭のロバが相ついで谷底に墜落してしまつた。棒でひっぱたりするが、そのうちに、二頭のロバが相ついで谷底に墜落してしまつた。幸いに死にはしなかつたが、体のいたる所から血がふき出して幾分あわれをもよおした。この二頭はもう使いものにならないので解雇してしまつた。荷をおろしてやるとロバは、ヒヨッコリとおきあがり結構元気にスタッフルンジュを出てからキャラバン二日目の十四日、カウジヨンといふ村に着いた。この地より我々は、目的の山ミールサミールと無い奴がいるらしい。その荷物は我々人間がかつぐことになつた。十六日正午頃、初めてお目当てのミールサミールが姿を現わした。やはりカウジヨンから見えた山はミールサミールの前衛峰に過ぎなかつた。ミールサミール主峰は雪は少ないが、急峻な岩稜、岩壁で四方を固く擁護された岩山である。黒い程の青空に真白な浮雪を配したコントラストに初めて見るミールサミールは厳しくも美しかつた。

会員消息

◎金田近二氏よりの便り

此度、中川会長の推選により、一橋山岳部創立者の一人、金田近二氏が名誉会員に迎えられましたが、最近同氏より幹事宛、金五千円の御寄付と、次のような便りがありました。

此度は、会報十三、四号及び会員名簿等御送付下され、有難う御座いました。名簿を見ましたところ、小生いつの間にか名誉会員に祭り上げられてありますして恐縮致しました。

それと共に、大正十三年に中川君と共に、一橋山岳部を創立した当時のことと思い出しうれしく思いました。

会則によると名誉会員は会費負担の義務は無いようと思われますが、会の財政も必ずしも充分ではなさそうに思われますので、茲許金五千円也、同封お送り申し上げましたから、御受納下されば幸甚です。

遠方に居りますので、針葉樹会の会合等に出席は困難ですが、時々所用で上京することもありますので、うまく都合がついた時は出てみたいと思っています。従って、会合のある時は日時、場所等一応案内状を送つて頂け

たら幸いです。

一橋山岳部も創立以来既に四十数年を経た訳ですが、五十周年が来たら何か記念の催しをやり、又、「一橋山岳部五十年史」を作つたらどうかと考えます。それに備えて今からボツボツ準備をやり始めても、計画の内容のたとえ何年も前に亡くなられたのであっても、追悼文を載せて故人の有りし日をしほのは決して意味ないことではないと思うから。これについて会員諸兄の御協力をお願ひする次第である。

終りに、針葉樹会並びに一橋山岳部各位の御健康を祈ります。

金田近二

◎ご結婚おめでとう

去る九月一〇日、宮本英二氏（昭三七卒）が、めでたくゴールインしました。

原稿を依頼すると、即座にパッと書いてくださる方と、何度もサイソクされど全く音沙汰なしという無情な人と居て、仲々足並がそろわない。早い人に氣の毒だけれど、どうしても発行が遅れ、話のタネが古くなる由縁である。

今回、最後まで残ったのは、カラコルム先遣隊の報告だったが、筆者の丸子氏が急にハワイへ出張され、急拵代役登場となりました。それから、手ちがいで、三章、カブールの頂がとんてしまいまことに申し訳ありません。

倉知敬

編集後記 磯野先輩がこの六月、惜しくも亡くなられたことは、皆様御承知のことと思う。これについて、「いつの間にか名簿では物故会員の欄に移されているのに、会報で何もふれてないのはおかしいじゃないか。」といふおしかりを各方面からいたゞいた。実をいうと、これは今度が初めてのこと

でなく、すでに今迄、清水一郎氏、川村喜作氏、中村賛治氏、赤城鈴太郎氏など、前例にこと欠かない。磯野氏追悼については、次号でとり上げる準備をすゝめているが、その他の方々についても、追つて何らかの形で追悼号を出したいと思う。たとえ何年も前に亡くなられたのであっても、追悼文を載せて故人の有りし日をしほるのは決して意味ないことではないと思うから。これについて会員諸兄の御協力をお願ひする次第である。

さて、今号は夏山特集ということで、なるべく早く出そうと思っていたが、そういうなかなか思うようには行かないものだ。いささか内容が季節的に古い話になってしまつて恐縮である。

原稿を依頼すると、即座にパッと書いてくださる方と、何度もサイソクされど全く音沙汰なしという無情な人と居て、仲々足並がそろわない。早い人に氣の毒だけれど、どうしても発行が遅れ、話のタネが古くなる由縁である。

今回、最後まで残ったのは、カラコルム先遣隊の報告だったが、筆者の丸子氏が急にハワイへ出張され、急拵代役登場となりました。それから、手ちがいで、三章、カブールの頂がとんてしまいまことに申し訳ありません。

